

【事例1】福井ほか／東北タイ／ドンデーン村

1. 調査

対象

東北タイ、Khon Kaen 県 Don Daeng 村(以下、DD 村と略す)(1981年人口 900 人)

調査者

石井米雄を代表者とし、福井捷朗、海田能宏、口羽益生を中心とする日・タイ両国の学際的編成チーム。1964-1965年には水野浩一が同じ村を調査している。

調査期間

1981-1984年

報告

成書としては、下記の3冊。人口・食糧については、主に前2者。他に論文多数。

福井捷朗『ドンデーン村；東北タイの農業生態』東京：創文社。1988年。

Fukui, Hayao. 1993. Food and Population in a Northeast Thai Village. Translated by Peter Hawkes. Honolulu; University of Hawaii Press. pp. 421.

口羽益生(編)『ドンデーン村の伝統構造とその変容』東京：創文社。1990年。

なお、1960代の水野による調査は、水野浩一『タイ農村の社会組織』東京：創文社にまとめられている。

2. 対象の概要

地域の概況

東北タイ、コラート高原は、全面積、水田面積、人口のいずれにおいてもタイ国のおよそ3分の1の比重を占めるが、その一人当り所得は、全国平均の3分の1に過ぎない。これは基本的には劣悪な自然環境によるものである。19世紀

以降、急速な人口増加と耕地の拡大があったが、デルタ地帯と異なり、余剰米をほとんど出さず、米自給生産の拡大があっただけである。すなわち、もっぱら耕地拡大による増加人口の収容が地域内で進行した。第2次大戦後、商品作物栽培が普及し、1970年代以降は農外収入の比重が増しているが、なお、人口はバンコクなど大都市に流出している。

コラート高原は9-14世紀にはアンコール帝国の一部をなしていたが、アンコール没落後、政治的、人口的「空白」が続いたとされる。18世紀後半以降、ラーオ人がメコーン河を渡って移住し初め、今日では東北タイのラーオ系人口はラオスのそれを上回っている。今日、高原西南部を中心とするシャム系、南部のクメール系、その他の大部分を占めるラーオ系の3つの民族分布がみられるが、タイ国人として同化が進んでいる。

対象集団の概要

村は塊村をなし、高原上を東流するメコーン河の支流、チー川の氾濫原に臨む。全住民がラーオ系であり、もち米を常食とする稲作民である。すべて天水田であり、旱魃、洪水により極度に生産は不安定である。

稲作以外にキャサバ、野菜を栽培するが、ほとんどが現金収入のためである。その外、通勤による農外収入が多い。これは約20km²にわたる Khon Kaen 市に就業機会が増加し、その通勤圏内に取込まれつつあることによる。

3. 調査項目と方法

人口

在村人口：調査時皆悉調査、1964年水野皆悉調査、1944年家屋配置再現、1912年大火事時の世帯数などから今世紀を通した人口を推定。さらに系図一大家族史調査(皆悉)で補正。

出生、死亡率：調査時既婚女性232人の出産経験と、その子供876人の生存・死亡により、コホート生命表、コホート出生率を推定。

移動：上記の在村人口推計と、出生、死亡率による自然人口増加率との差から移動を推定(間接法)。系図一家族史調査による直接移動推計(直接法)。

米生産

生産が極度に不安定なため、平年値を求めることが困難である。降雨量をインプットとする米生産経年変動シミュレーションモデルを構築することによって、1930年代、1960年代、1980年代の3時期について長期米収支を求め、「備蓄枯渇年確率」によって、それを表現した。

村経済構造

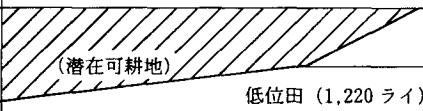
1960年代については水野調査によって、1980年代については今回調査によってほぼ定量的に把握できた。それ以前については、在村人口と米生産シミュレーションによる米収支が推定されただけである。

4. 主たる結論

人口、米生産、村経済構造の3者の今世紀初頭以降の変遷をほぼ跡づけることができた。その概要は、次ぎの表に総括されている。

1870年代にチー川下流から農民の小集団による自発的開拓移住(*ha na di*)があつて、DD村は始つた。これはコラート高原へのラーオ系住民進出の大きな流れと一致する。DD村は1920年代までこのような開拓民を受入れ、在村人口の増加率は自然増加率を上回つた。1930年以前には優良稲作地はすべて占拠され、新たな移入はなくなった。

以降、大戦中に棉栽培が始るまで、ほぼ自給経済のまま増加人口に対応しなければならなかつた。この対応は、ひとつには劣等耕地の拡大により、もうひとつにはチー川のさらに上流への *ha na di* 移出によつた。劣等耕地は、それだけを耕作したのでは生活を維持できないほど低収、不安定であつたが、優良耕地との同一経営体内での組合せによって意味をもち、村の最大収容人口の増加に寄与した。これは耕地拡大であり、土地利用の集約化ではないが、一種の *agricultural involution* といえよう。この段階に至るまでは、村内資源量が

西暦	1900	10	20	30	40	50	60	70	80
人口史的時代区分	第Ⅰ期			第Ⅱ期	第Ⅲ前			Ⅲ中	Ⅲ後
在村人口概数(人)	150		320		500			810	900
増加率(％／年)		3.8		2.7		1.8		1.0	0.3
自然増加率(％／年)		2.2(?)		2.2		3.2		2.2	
移出入(人／年) (内ハーナーディー)		+3.6 (≒)		+0.1 (≒)		-11.0 (-8)		-10.8 (-8)	(-4)
村内生活の相対的 <好ましき>		+		±		-		-	-
水田面積									
備蓄枯渇年確率	(≦6/100)			6/100			17/100→		
村経済の構造									

最大収容人口を規制するという意味で carrying capacity の概念を適用でき
 ると思われる。

棉を嚆矢とする商品作物栽培は現金をもたらし、不作年の米不足を乗切ること
 を容易ならしめ、よって備蓄枯渇年確率の低下を許した。しかし、死亡率の
 低下、高いままの出生率によって *ha na di* は継続した。この状態は、1970年
 代初め頃まで続いた。この期間の在村人口は、表面的には依然として米収支に
 よって規制され、したがって carrying capacity 概念が適用可能のように思
 われるかもしれないが、この間を通じて生活水準は上昇しているので、同概念
 の適用はできない。

1970年代になると在村のままの賃金労働の機会が増え、また移出者の行く先
 が開拓地から大都会へと変化し始めた。また、1980年代には米収入が全収入の
 20 %を下回っている。にもかかわらず在村人口は依然として米収支と整合的で

あり、かつ村民の職業意識は稲作農民のままである。これは現金収入源が不安定であること、フローに対するストック指向とも関係する。

今世紀を通じて在村人口の動態とくに人口移動を統一的に理解するには、在村を続けた場合と、移出した場合に期待される生活の「好ましさ」の相対的な差を中心に考えることが可能であろう。この好ましさの判断にとって、自給的生活が内外で卓越している時期には、もっぱら米収支が重要である。現金収入の増加とともに米収支の重要性は徐々に低下し、現金収入の機会、次いで農外就業の機会が好ましさの判断基準として重要性を増す。にもかかわらず米収支は、今日に至るまで依然としてその意味を失っていない。長期的に米自給できない家族が在村を続ける意味はないからである。

しかしながら、ごく近年には、まったく米生産に依存しない人口が発生しつつある。これは DD 村が近郊農村型に変化しつつあることの表れである。将来、米収支は、その意味を減少させて行くであろう。

DD 村の場合、その開村当初から、経済的にはともかく、人口的、社会的には村は閉鎖系ではない。コラート高原は、つねにフロンティアをもつ空間であって、少なくともラーオ系住民にとっては、いわゆる近代化以前から「開かれた」社会であった。この特徴は、相互扶助、相続、結婚、家族、宗教などの面においても表出している。

5. コメント

広範かつ詳細にデータを収集してはいるが、その分析並びに分析結果のこなれは十分ではない。

例えば、補完的耕地拡大である。1930年代後半から 1950年代にかけて開田された中、高位田は、その部分だけを耕作したのでは労働の再生産さえも不可能なほど生産性の劣る土地であるが、それが開田されたのは、生産性の高い低位田と同一経営内において組み合わせされていたからだという。このような耕地拡大は、通常の意味における耕地拡大とは異なるがゆえに、「補完的」と名付

けられた。ところで耕地拡大と集約化とは、人口圧の高まりに対する農業の対応の二つの形であるといわれるが、この文脈において補完的耕地拡大がどういう位置付けとなるかは、もっと議論されてもよい。

天水田である限りは集約化による生産増は困難であるから、もっぱら耕地拡大によらなければならないとされている。しかし、天水田においても化学肥料の施肥と適当な品種の組み合わせによって収量を高め、商品米生産を行っている場合が同じ東北タイにもある。いかなる条件において、それが可能であるのか？

少なくとも18世紀後半以降にコラート高原に進出したラーオ人は、ここに述べられたような開かれた社会に生きていたかも知れない。しかし、彼らがそれ以前にメコーン河左岸に居住していたころから、このような特徴をもっていたのであろうか。あるいは、コラート高原に進出することによって、このような特徴を後天的にもつに至ったのであろうか？

第2次大戦中に棉を栽培したのが DD 村における換金作物栽培の嚆矢であるが、かといって、それ以前の村経済がまったくの自給自足であったといえるであろうか。東北タイは地域としてはほぼ自給的ではあっても、あるいはむしろそうであるからこそ、地域内において農産物以外のさまざまな必需品が生産されていた。それらの多くは、農村工業によって行われていたと思われる。そして、そのような農村工業は、地域外の大量生産による商品の移入によって破壊されたと思われる。であるならば、この研究で言及されている今世紀初頭以降はともかく、それ以前にまでさかのぼれば、案外、自給色は希薄であったかもしれない。さらにそれは、かつての製塩や製鉄にもつながるかもしれない。

(福井捷朗記)